

雨の日の保育の実際と原理



谷 口 緑

幼稚園の生活に雨は一番の困りもの、特に設備の不十分な田舎の

幼稚園教師の経験のある人なら、必らず、雨の日の保育に神経をすりへらし、一日中やり切れない思いで過ごした思い出を持っているのではないかと思う。どうして帰宅までの時間を過そうか？ と雨

空を見上げて、先生の顔こそ今にも降り出しそう、と言う図はそのような施設でならどこでも見られる梅雨期の風景ではなからうか。

けれども新まいの先生がいかに嘆き、せめて子どものいる間は降らないで、といのつても雨は降る。一年の中三分の一近くはうつとうしくビシヤビシヤ降る空の下での保育を覚悟せねばならないので

ある。

はち切れんばかり活動意欲のあり余っている子どもたちをせまい屋内に閉じこめても何とかけがなく、けんかも少なく、出来れば先生の神経も余りすりへらすことなく……である。

保育日数の三つ割近くもあるという雨の日を、魚が水の中で傘をささずに快適に暮しているように、子どもたちを思う存分活躍させたい。完全防水で、しかも汗っかきの子どもたちの肌のために通気性もあり、面倒な手間もかからない、そんな服装をさせることが出来たら、お母様たちにしかめっ面をされることもなく思い切り雨の戸外で飛びはねさせてやれるのに。

「雨が降ってるから外で遊んではいけません」

とは誰が定めたのか。それでも時どき、がまんし切れなくて先生
の目をぬすんでは庭に出、雨の花壇、池の金魚に目をひかれ、果て
は水たまりをえらんで歩く子どもたちの姿を見れば、こんなに楽し
んでいるんだから雨の戸外に連れ出すこともいいではないか、うま
く指導と管理が出来さえすれば……と思うのは私ひとりではないと
思う。

けれども三十人もの子どもをひとりで預って、そんな思い切った
ことをして、もしも誰かが風邪をひいたら、お腹をこわしたら、申
訳がない。やはり君子危きに近よらず、何とか屋内で遊ばせなけれ
ば、というのが実状である。実状にあった方法を考えねばならない
と言うことである。それならばせめては、いたずらに嘆くことをや
めて雨の日の積極的な生活のし方を考えよう。

幼児保育の原理は、幼児の生活そのものと教育の目標とから導き
出される。山下俊郎氏によればそれは、基本的原理——文化適応と
間接性の上に立って、方法原理として——自発性、興味性、環境、
機会、経験、個性、発達各原理である。

雨の日と言っても保育活動全般に通じる原理には変りがあるはず
はないが、雨の日という条件のもとに特に考慮をはらわねばならな
いことは何だろうか。民主的社會人の育成という教育目標は、もち

ろん変らないとして、子どもたちの雨の日の生理と心理はどうだろ
うか。それを考えて見よう。

自己中心、興味本位、多分に情緒的であるために極めて動き易い
心身の特徴とする子どもたちにとって雨の日は、その成長盛りの自
然の要求として持っている手足の動きを思い切り試すための広い場
を取り上げられ、おとなたちからはじゃま者扱い、到る所で禁止、
禁止、の連続する日である。したがって心身共に抑圧された状態に
なり易い。子どもたちは自覚していなくても、一触即発、いつ爆発
するか分らない危険をはらんだ状態におちいり易い。

そのさかなエネルギーのはけ口を用意してやること、他人の立
場を浸害することなく、正しくはき出せる場と機会を用意してやる
こと。そのことに教師の精力は傾注されるべきである。環境、機会
の方法原理が最も強く働く時である。

なるべく手のかからないように、問題の起こらないように、集め
て一斉に、という子どもたちにとって受動一方の生活だけでなく、
せまい屋内での生活という限られた条件でも、それを積極的に利用
することを考えよう。

先ず環境の原理に従って、子どもたちが自発的に興味をもって遊
びを展開し持続できる、即ち効果的な学習のできる環境を調えよ

う。

○不必要なものは片づけて屋内をできるだけ広く使えるようにする。せまい所に多勢でいるために起こる事故をさけるためである。

○子どもたちの興味をひき、はり切って活動できる遊びの材料を豊富に準備する。

室内砂場、マット、積木、大工道具、ままごと道具、リズム楽器、絵本、指人形、まり、特に製作材料として布切、包紙、空びん、空かん、木切、横画材料など。

○散乱し易い室内を整頓するために子ども用掃除用具を準備する。

○雨具のしまつが出来易いような設備を調え、工夫をする。

○清潔、乾燥、換気、採光、この四つを忘れてはならない。汚れたりぬれたりした場所はすぐふき取り乾かす。窓を注意して時々開放し、せまい室内に多勢いるための空気の汚染をなくする。

光線をさえ切るものを取り除き、適当に人工照明を使って眼の疲れを防ぐ（一〇〇ルクス以下では眼が疲れ心身に健康上有害である）。

機会の原理に従って

○限られた遊具、玩具をゆずり合って使わねばならないこの機会に、協力、協同の生活態度を指導する。せまい屋内で、子どもたちそれぞれの要求がぶつかり合う雨の日は、正しく自己を主張すること共に、他を認識し、協同を学ぶ、民主的社會人としての生活態度の基礎を訓練する最も良い機会である。

○雨降りのようすを観察し、雨の効用を理解させ、自然現象への探究の目を開くよい機会である。天気図を作る、つぎ足し話を作る、雨に関連した歌やリズム遊びをするなど、各保育内容にまたがって。

○非音楽的そう音にさらされるこの時、いら立つ神経をしずめるためにも、対照的に美しい音楽をきかせることが出来ればその機をもとにして音楽への興味を誘発することができる。

○教師のよい指導と環境設定によって、子どもの生活条件としてマイナスの多い雨の日も楽しんで生活するし方を学ぶよい機会である。

次に、人的環境として教師の指導態度こそ大切な条件である。前記のような環境を設定し、機会を揃えて学習の媒介するのは教師

である。教師がそれらを効果的に運用し活用することができなければ、よい環境も機会も無きに等しい。広々とした戸外を利用することができない雨の日は、特に教師の指導態度の影響が大きい。

○教師自身がいたずらに雨を嘆いていないで、雨の日でなければできない学習経験をさせることに集中する。例えば、

新聞を読む、続き物語を読む、子どもたちと一しよにお話を作る、お話から劇遊びに発展させる、紙芝居を作らせる、など。

○平素より多く集団的な遊びを用意し、教師が積極的に誘導する（そのような遊び方を常に研究しておくことが必要）。例えば、いす取り、子どもの王様、売屋さん、ことば遊び、音当て、席かえ、など。

○柔軟で安定した精神状態を維持することにとめて、何時現われるか分らない指導の機会を逃がさないこと。特に、集団で教師が積極的に誘導していく時間と、緊張を解いた個人的な自由な時間との、適当な切りかえに気を配る必要がある。

○ゆう通性のある保育計画を立てて、子どもの状態に応じて無理をしないことが必要。

○他の組の教師とよく打ち合わせして、静かにする室（絵本を見る、お話を聞く、テレビ・ラジオを見・聞きする、人形芝居、紙芝居を見るなど）と、思い切り活動してよい室（積木、こ

こ遊び、運動具を使う遊びなど）とに分け、組の解体を試みたり、廊下を使用する時間を交替にして、気兼ねなく子どもたちを活動させられるように配慮する。

○一人ひとりの子どもの状態に特に注意しよう。視診は朝ばかりでなくいつも気を配っていて、子どもたちの心身の変化を先手先手に発見し、速やかに手を打つことである。

以上、雨の日の現実を見つめながら、考えられることを述べてきた。

暗い雨空に負けない精神的な明るさと、積極性をもって、子どもたちの生活を誘導しよう。強い生活力を持つ理想の人間像を目指して。

（和歌山信愛女子短期大学）